幼児教育公開講座

おもちゃのチカラ～子どもの感性を育むために～

東京おもちゃ美術館館長　多　田　千　尋

日時：平成24年 10月6日(土)　会場：仁愛女子短期大学

はじめに～芸術文化と遊び文化

私の専門は実は大きく二つあります。ひとつは子どもです。今から約 25 年前に、私は子どもの専門家として生きていこうと思っていました。

しかし、つい最近お亡くなりになった社会福祉学者の一番ケ瀬康子先生に出会い、「これからの子どもの専門家は高齢者のことも強くないとだめよ！」と言われまして、その言葉にまんまと感化されてしまいました。それ以来、もうひとつの専門には高齢者福祉が加わり、二枚看板になっていったわけです。

「おもちゃ＝子どものもの」とは思っていないのは、そのような専門性も反映しているからです。おもちゃというのは赤ちゃんでも楽しめ、お年寄りでも手ごたえを感じるものという視点で考えています。ドイツに初めて行って、おもちゃ屋さんでおもちゃを見た時は感動しました。対象年齢が 3 ～ 99 歳と記載されていたのです。この 99 歳にびっくりしました。これは、「永遠に遊べますよ」つまりエイジレス・トイという意味だなと思いました。この国には、おもちゃは子どものものという概念はないと学びました。私も似たような考えです。

子どももお年寄りも、私からしますと、２つの文化が必要だと思います。ひとつは芸術文化、もうひとつは遊び文化です。幼稚園の先生や保育園の先生は、芸術文化と遊びの文化の二刀流で生きている専門家なんです。この世界でリストラになっても老人ホームの世界で活躍できますよ。

熊本のある介護老人福祉施設では、10 人を採用する時、7 人は介護福祉士ですが、残り 3 人は保育士だそうです。施設長に理由を聞くと、「保育士は専門性が高い。お年寄りと何気なくわらべ歌が歌えるのよ。介護福祉士にお年寄りと一緒にわらべ歌を歌ってと言う

と、前の日から緊張しちゃう。でも保育士は何気なく歌える。その何気なく歌えるという力は尊い。」と言うんですね。

芸術文化と遊び文化は双方に必要だというところが、今日の話の背骨になってくるわけです。

おもちゃのチカラ～基礎編①「音にこだわる」

適当にたたいても必ず琉球民謡になってしまうという木琴があります。普通の木琴をめちゃめちゃにたたいてみてください。もういい加減に止めてという気持ちにしかならない。でも、子どもがめちゃめちゃにたたいても必ず琉球民謡という美しいメロディーになるとしたら、もう少し聞いてあげようかな、もう少しさせてあげようかなと親がやさしい気持ちになるんです。これは優れものだと思いました。

沖縄のデイサービスセンターに持っていったら、あるおばあが、私の手から奪って夢中になってたたき始め、ものすごい笑顔になりました。85 歳のおばあにとって、楽器で心地よいメロディーを奏でるということは人生初めての経験だったと思います。

人間にとって、これはうれしいことです。なかなか楽器で幸せな気持ちになるというのは難しいことで、私た

ちが楽器で幸せな気持ちになるには、ある一定の訓練が必要ですよね。

そのおばあは、まさに幸せな気持ちになったんですね。そしたら15分間ずっとたたきっぱなしだったんです。そしたら隣でおじいが両手をあげて踊り出しました。週一度来ている作業療法士がびっくりしました。この療法士は「3年間このおじいと付き合っているが、右手が肩より上にあがるのを初めて見た。作業療法の無力さを感じた。」と悔しがっていました。おもちゃって不思議ですね。遊びって本当に不思議ですよね。

アメリカのおもちゃで、4ヶ所にホイッスルの音が重なり合い、ものすごく厚みのある音がするおもちゃがあります（写真1）。神奈川県の盲学校にこのおもちゃを持っていってこの音を聞いてもらいました。やはり音に対する反応は感性豊かですね。すぐさまこの音を奏でてみたいと言いました。先ほどの木琴もすぐ自分でやってみたいと言って、目の不自由な高校生達がずっとやっていました。

美しい音を奏でられるというのは、人間本来持っている幸せ感であり、憧れ感というところがありますよね。音とおもちゃの関係論、このあたりを保育者の方々に深く研究してほしいところです。音にこだわって、おもちゃを買いにいく。音にこだわっておもちゃを吟味する。そのあたりが、プロとしてのおもちゃの選び方になってくるんじゃないでしょうか。

（写真１）
蒸気機関車が空を駆け上がるような音のするおもちゃ

おもちゃのチカラ～基礎編②「手にこだわる」

私は、子どもたちにいいおもちゃを使っていい手仕事をいっぱいさせたいです。手の運動と指の運動を活発にしたい、手と指をフル活動させたい。さぼらせたくない。そういう思いがすごくあります。漫然と「皆さん、指を動かしましょうね。」と言ったって駄目ですよ。だから皆さん短大時代に、手遊び、指遊びを身につけて、自分の手をおもちゃ化して子どもたちに楽しさを伝えて、手と指が動けるようにスキルを磨いたわけですよね。

おもちゃも同じですよ。おもちゃが子どもたちの手をフル稼働させるんです。積み木にしても指の運動、手の運動がフル稼働するわけですよ。ブロック遊びもそうですね。おもちゃを頼って子どもたちにいい手仕事をさせたいです。皆さんの園にはいっぱいありますよね。とても大切なことですね。

手仕事とおもちゃの関係で言うと、私が好きなものは「独楽」ですね。皆さんの保育園では、独楽は力を入れていますか？独楽遊びをすることはあっても、重点項目にはなっていないですよね。

（小さな独楽を見せて）この独楽は小さいですがものすごく人気があります。この独楽は回っている姿を横からみると富士山が見えるという独楽なんです。私は「独楽を回そう」とは言わないんです。「富士山作ってごらん」と言うと子どもたちは一生懸命富士山を作ろうとしますよ。回せないと、ものすごく悔しがって毎日でもやりたがりますね。回せたときは人生でこんなにも喜ぶことがあるかというくらい喜びますね。達成感がある。このように、おもちゃは、子どもたちを知らず知らずのうちに前のめりにさせ、前向きにさせて手を動かせる不思議な力を持つ道具ですよね。僕は、そんな道具はないと思っています。

3本指でつまんでくるっと回転させる3、4歳児はそんなにいないですよ。しかし毎日毎日やっていますと、みんな見事に独楽を回せるようになってきますね。独楽を回せるということは、親指と人差し指と中指が見事に鍛えられます。3本指が鍛えられると、全部生活に跳ね返ってきます。独楽が上手に回せるようになると、ボタンが上手にはめられるようになります。独楽が上手に

回せるようになると、クレヨンがきちんと持てるようになります。迷いのないしっかりとした線が描けるようになります。独楽が上手に回せるようになると、お箸もきちんと持てるようになります。みんな遊びの中で手を鍛えていくと、生活に跳ね返ってきます。ただ、楽しい思いをしましょうね、と留めてしまうのが保育なんです。これは単に遊びですね。保育の中で遊びを考える場合は、生活とつなげる必要がある。お箸やボタンなどのしつけの中でうるさいことをガタガタ言うのではなくて、遊びの中で子どもの手の活動、指の運動をしていくと知らず知らずのうちに、子どもたちの指はしなやかに動くようになる。そして力強く動くようになっていくんですね。

私は、子どもが卒園までに紐の独楽を回せるようになるのがひとつ目標です。紐が巻けるということだけですごいでしょ。すごい高等技術ですよね。ただ床の上だけで回せるのを満足させるのではなくて、手のひらで回す。そこまでいけたらすごいですね。卒園までに回せるようにするためには、まずは見本を示すため保育者が回せないといけないですよね。

実は今日のテーマは子どものための遊びじゃなくて、保育者のための遊びに切り替えた方がいいかもしれませんね。保育者が実は、一番遊んでいないということがあるかもしれません。3日間練習すれば誰でも回せるようになります。そしてまず子どもの前でやるんです。子どもの前で、手のひらで回すといいことがたくさん起こります。一番いいことは、子どもから確実に尊敬されます。この先生すごいって。この先生についていけば大丈夫だと思われます。保育というのは、子どもに尊敬させたら勝ちですよ。逆に、子どもに馬鹿にされたらつらいですよ。遊びの名人になると子どもから尊敬され、尊敬されると保育は楽になります。

（写真２）講義終了後、おもちゃに夢中になる参加者

今は、「手」のことに絞ってお話をしましたけれども、保育者の方には、おもちゃをいろいろな角度から見る確かな目を養っていただきたいなと思っています。

おもちゃのチカラ～社会編①「東北での支援」

今日のタイトル「おもちゃのチカラ」が東北の被災地でどのように役に立ったのか皆さんにお伝えします。

平成23年の4月7、8、9日に行きました。行ったのが地震の3週間後でしたから、がれきがほとんど撤去されていませんでした。そういうレベルではなかったですね。この段階では命の問題とか胃袋の問題とかいう時でした。

おもちゃが30個入っている赤い箱を約300個作りました。世界各国からおもちゃの寄付をいただきました。なるべく明るい色のデザインを届けようと思いました。ブルーシートと段ボールだけでは、人間は疲れちゃう。こういう時はデザイン性が優れた床材なども届けることは大切ですね。被災地などはデザインがなくなります。ブルーシートや段ボールの中にいると、だんだん心もすさんでくるんですね。そこに赤や黄色の明るい色が入ってくると、少しばかりですが元気づけるということはあったみたいですね。

1,000人の避難者の方が暮らしていた中学校にプレイコーナーを作らせてもらって、遊んだらそのままおもちゃを置いてきて差し上げる、こういう活動を150ヶ所でやらせていただきました。

皆さんと同業者の保育士さんもこのプレイコーナーを手伝ってくれました。職場がみんな津波で流されてしまった、働くところがなくなってしまったんですね。皆さんが何か私にお役に立てることはありますでしょうかと、自発的に来てくださったんですね。ご主人を亡くされた保育者もいらっしゃいました。たぶんプレイコーナーをお手伝いするような精神力は本当はなかったと

思います。でもこの時やっぱり保育士は強いなと私は思いましたね。子どもたちの中に入ってくれて、遊びのプロとしてずいぶんがんばってくださいました。

皆さん喜んでくださったのは、子どもたちの笑顔を久しぶりに見たということでした。子どもたちも我慢していたみたいですね。積み木を使って遊んでいる子の中に入りますと、結構残酷なことを言っていることもありました。「そんな家を作るからまた流されるぞ!」とか、ひどいことを言い合っていてびっくりしました。でもそうやってお腹に溜め込んでいるものを喉から吐き出すことはとても大切なことだとカウンセラーの方が言っておられました。

人間とは2つの栄養がないと生きていけないと思っています。ひとつは食べることです。身体にとっての栄養ですね。もうひとつは心の栄養です。体が栄養満点でも、心が栄養失調だとたぶん生きていけないと思います。ただ呼吸しているだけなら生きていけるかもしれないですけど、自己実現を果たす、生きがいを持って生きていくなら、確実に心の栄養が必要になってきます。当然0歳～6歳の時から体と心のダブルの栄養満点でなければ生きていけないと思います。つまり、遊びと芸術の栄養補給をする保育者の仕事とは、実は「心の管理栄養士」だということを強調したいと思います。

おもちゃのチカラ～社会編②「病児への支援」

もうひとつ、心の栄養補給が必要なのが病児ですね。私たちは「ホスピタル・キャラバン」という事業の中で、病院専用の移動おもちゃ美術館セットを作りました。これを広げれば暗い病院であっても、たちどころに明るいプレイコーナーができるということを目指したセットです。

お腹に内臓がたくさん入っているくまのぬいぐるみがあります。心臓、胃、腸などを話題にしながら、子どもたちとナースや院内保育士が、自分の体のことをよく知ろうと、遊びを通じてインフォームしていきます。あるいは、点滴台、ストレッチャー、CTスキャン、MRIなどのような医療器具を木のおもちゃで作ってもらいます(写真3)。それらを使って一緒にごっこ遊びをします。

(写真3) 木でつくられた医療器具のおもちゃ

子どもたちは年がら年中検査されていますので、みんな詳しいんです。検査技師がどういう言葉がけをしているかも模倣できるんですね。このようにごっこ遊びをしていますと、過剰な恐怖心が消えてくるんです。これはとっても大事ですね。

日々怯えて闘病生活を送るか、それともワクワクして闘病生活を送るか。どっちが早く治ると思いますか?これは検討するまでもないと思います。子どもたちは、どんどん遊びのほうに前向きになっていきます。遊びのほうに前向きになっていくということは、必ず心身ともに前向きになるということですね。

保育者に期待したいこと①
～「五大芸術の総合実践家」

今日の講演会のサブタイトルには、「子どもの感性を育む」と付いています。しかしそんな日ごろ頭の中で感性、感性なんて浮かべながら保育をやってはいないと思います。でも、改めて立ち止まり、私たちがやっている保育はいったい何なんだと考えると、その根本はある意味、「感性保育」なんですね。皆さんの研ぎ澄まされた感性で子どもたちに勝負をかけているんです。

一般的に乳幼児は感性豊かな時代と言われています。0歳～6歳までの保育園にいる子どもたちは感性豊かな人たちばかりです。では、感性豊かな子どもたちにどうやったら保育士はアプローチをかけていけるのかというと、それは間違いなく「芸術」です。もうひとつ言えば「遊び」です。私は遊びと芸術は分けて考えていますが、根っこの部分は一緒だと思っています。

日本の場合はこれを分けて考えなくてはいけない事情も発生してしまいます。日本では、3 歳児が砂場遊びをしていると「遊び」と言いますよね。でもバイオリニストの演奏を口が裂けても「遊び」と言ってはいけないですよね。これは日本流です。でもアメリカでは、3 歳児が砂場遊びをしていると「プレイ」といいますが、カーネギーホールで一流ピアニストが演奏しても「プレイ」といいますね。同じ言葉で両者を表現できます。

感性がもっとも豊かだと言われている、0 歳から 6 歳のところには遊びと芸術で勝負をするべきだというふうに思っています。

実はもう皆さんは、遊びと芸術で勝負をかけているんですよ。皆さんが子どもたちに八つ切り画用紙を配った時は完全に「美術」の先生ですね。でもずっと美術の先生をやり続けることはない。すぐピアノの前に座って、「音楽」の先生になります。絵本の読み聞かせや紙芝居を読むと、「文学」の先生になります。劇遊びをする時には、「演劇」の先生になります。砂場で砂を掘り川を作る、ブロックやつみきで家やお城を作る時には、「建築」の先生になります。

このように、皆さんの仕事はまさに五大芸術の総合実践家です。これが皆さんの背骨ですね。五大芸術の総合実践家を正々堂々とできる職種は、幼稚園の先生や保育園の先生以外に私は知りません。すごい仕事ですよね。

保育者に期待したいこと②～「木育推進の実践家」

私は木の専門家に尋ねました。「赤ちゃんが床でハイハイするのに一番適している材は何ですか」と。10 人の専門家は口をそろえて「それは杉以外考えられない」と答えました。しかもできれば厚さ 3cm の床材を敷いてくださいと言われました。本来 3cm は厚すぎます。一般住宅なら普通 12 ～ 16mm ですね。私はだまされたと思って本当にやってみたら（写真 4）、専門家が言うようにとってもよかったです。床暖房なんてちっともいらないですね。とっても暖かいです。それと杉は人間の心を和ませる成分を発しているので、人間の心を落ち着かせる成分が 3cm のフローリングからバンバン出

（写真 4）赤ちゃん木育ひろば

ているんです。

この部屋には子どもたちが遊びに来ていますが、三つの特徴があります。一つ目は、赤ちゃんが泣かない。赤ちゃんが泣かないのは杉の力じゃないかと推測しています。二つ目は、お母さんたちがまったく携帯電話を使わない。わが子が生き生きと遊ぶので、ママ達は遊ぶ姿に完全に目を奪われています。三つ目はパパたちの滞在時間が異常に長い。いつまでも居たくなるようです。

また、木のおもちゃにある木目は、子どもたちの集中度を高めるとも言われています。子どもたちは木目に対して集中して見ようという頭がすごく働くらしいです。皆さんも寝る時、天井の木目がよく見えていた経験があるかと思います。ずっと見ていると龍の顔に見えたり、時にはおばけの顔に見えたりして、しばらくしていると脳が覚醒化してきて眠れなくなってしまうこともあるんですね。それは天井の木目が、集中度を増させてしまったからです。

そして木は、いつまでも触っていたくなる素材ですね。木の地肌は、手のひらに心地よさを与え、匂いで楽しめる素材ですね。プラスチックのおもちゃをずっとなでている人はいないですよ。レゴブロックにいくら鼻を近づけても匂いはしません。でも木はずっとなで続けられます。ぜひ五感で勝負をしている子どもには、五感の勝負に値する素材のもの、より自然に近いもののほうを近づけるべきなのかなと考えるようになりました。

保育者に期待したいこと③～「アニマトーレ」

子どもたちに「アニマシオン」を上手にプレゼンテーションできる人を「アニマトーレ」と言います。アニマシオンとはスペイン語で、子どもがワクワクドキドキしている時に使います。0歳～6歳の時に、もっとも大切な栄養素と言われていて、ワクワクドキドキの栄養失調状態にしてはいけないということをスペインの方はよく言っているそうなんです。したがって、アニマトーレとはワクワクドキドキのプレゼンテーターということになります。保育士や幼稚園の教師がワクワクドキドキを上手に子どもにおもちゃの力を借りたり、遊びの力を借りたり、五大芸術を活用してワクワクドキドキを伝えられたとしたら、これは最高級のプロフェショナルになってくると思います。

皆さんの中には、アニマシオンやアニマトーレという言葉を初めて聞いたという方もいらっしゃると思いますが、実は皆さんはすでに知っています。英語に直すと簡単です。アニマシオンを英語に直すと、「アニメーション」です。アニマトーレを英語に直すと「アニメーター」なんです。しかし、私たちはアニメーションというと軽く扱う言葉になっていますよね。子どもたちに「アニメばかり見ているんじゃない」とかね。でも今日は、アニメーションとはとても奥深い言葉だって分かりましたよね。「アニマ」という言葉の語源は、「魂」です。魂が体の中でわぁーと騒ぎ出すことがアニメーションです。それを上手にプレゼントできる人をアニメーター、アニマトーレと言います。そうすると、うかつに子どもたちに「アニメばかり見てはいけない」と言えなくなりますよね。子どもたちに「ワクワクドキドキしてはいけない」と言うことになってしまいますよね。これは考えないといけないですよね。

このアニメーション、アニメーターという言葉を保育者として咀嚼していただいたいと思います。絵が上手だから、色を塗るのがうまいからアニメーターというのではない。子どもたちにワクワクドキドキをプレゼントできる人がアニメーターでしょうね。皆さんはアニメーターということです。そして、この仁愛女子短期大学はアニメーターの養成校ということになるわけですね。

では、そろそろ時間ですので、このあたりで終わりにしたいと思います。皆さんありがとうございました。

＜質疑応答の抜粋＞

【質問1】保育園に勤めています。子どもたちはすぐおもちゃを投げつけてしまいます。写真でもありましたが、木の丸いおもちゃなど投げたりしないのかなと気になりました。

【回答】そうですね、そういう心配が多いかもしれませんね。投げるのを躊躇させるには、大人たちがそういう空気を作っていかないといけないですね。対処療法的に注意しても、翌日また投げますよね。おもちゃは、実は投げてはいけないものだよ、という空気感を作ることもとても大切だと思います。

皆さん、食事のときにお茶碗を投げてはいけないよという空気感は上手に作られていると思います。おもちゃは投げるけれどもお茶碗は投げませんね。積み木は投げるけれどもコップは投げませんね。

これは一体何に原因があるかというと、その場にはおもちゃは投げてしまってもいい、という空気感がその場に漂っているのかもしれませんね。私たち職員がどういう環境を作っていくべきか、どういう空気感を醸し出していくべきか、ということから話し合いを開始していただきたいなと思います。私たちはこんなに大切におもちゃを扱っているのよということを、子どもたちに示すところからスタートされたらどうでしょう。

【質問2】毎月定期購読みたいに送られてくるおもちゃがあるんですが、それは大体プラスチックで、赤や青、黄色とかの色がはっきりしています。このようなおもちゃをどう思いますか？

【回答】私はあまり好きな言葉ではないですが、「知育玩具」の匂いがぷんぷんするようなおもちゃですよね。結論から言ってしまうと、知育玩具というのは世の中にはない、知育玩具という言葉もないと思っています。

少なくとも0～6歳までは遊びの天才です。遊びの一流プレイヤー時代ですね。遊びの一流プレイヤーと

いうのは手厚いケアをしなくても遊びこなすたくましい力を持っています。

砂場にしても、なんにもしてくれなくても、なんであんなに毎日毎日目を輝かせて遊ぶのかというと、一流プレイヤーだからですよ。そういう一流プレイヤーに対して、面倒見のいいおもちゃを近づける必要はまったくないと思っています。例えば電池で動くとか、音がするとか、画面から楽しいことがどんどん出てくるとか、待ちの姿勢でいても手厚いケアをしてくれるようなものは、天才や一流プレイヤーには必要がないかなと思っています。

一流プレイヤーには翌日も一流プレイヤー振りを発揮させたいですよね。雑木林でも目を輝かせて遊べる力がある子ども、川の石ころだけでもワクワクドキドキできる子ども、ブロックでも積み木でもどんどん遊べる子どもとか、自分から攻め込んでいかなければいけない、自分から手を伸ばさないと楽しめないもので、人生を自分から楽しむ力を０～６歳児はもっているんですよね。

いまお話いただいたおもちゃというのは、面倒見のいいおもちゃが毎月毎月届くのかなという気がしますね。遊びの一流プレイヤーにとって“もってこい”のおもちゃというのは、シンプル・イズ・ザ・ベストなものなのかなと思います。保育園ってそういうものしかないじゃないですか。保育園って、有機野菜のような無農薬野菜みたいなおもちゃばっかり置いてある施設ですよね。家に帰るとお菓子のようなおもちゃがいっぱいです。せめて、幼稚園や保育園は最後の最後までシンプル・イズ・ザ・ベストのおもちゃで踏ん張っていただきたいなと思います。

（文責：青井 夕貴）